

# 現代大学生論 ― 生徒化現象 ―



武内 清  
(敬愛大学特任教授)

## 一 三〇年前と今の学生の違い

現在、大学・短大の進学率が五六・七％（二〇一一年）で、同年代の六割近くが通うようになっている。大学がエリート段階（一五％）からマス段階（一五〇％）を経て、ユニバーサル段階（五〇％以上）に入っているのである。

現代の大学生の生活と価値観の特質は何であろうか。昔と変わらないのか、変化しているのか（品位が落ちているのか）、大学生に対するデータや筆者の体験から考えてみたい。

筆者が大学（都内の中堅の私立大学）の教員になったのは一九七〇年代の末である。その頃は、大学はレジャーランドと言われた。学生たちは、大学の授業にはあまり出席せず（三割の出席があればいい方だった）、サークル活動やコンパ、交友、合コンに、大学生活が明け暮れていた。

ただその頃は、大学・短大進学率は三割台（一九八〇年三七・四％）。大学に入学後は過酷な受験勉強の

反動で、勉強ではなく遊びに明け暮れていた。大学卒業後は猛烈サラリーマンとして働くことが宿命づけられていた彼（女）らは、受験と就職の谷間の四年間を、人生の中の唯一の休息（モラトリアム）の時期として楽しんでた節がある。

当時の学生の描いた自画像「武蔵太郎君の一日」がある（図1）。それには次のような解説が付いている。「朝一〇時に目を覚ます。一日の始まりだ。昨日の深酒が後頭部に残っている、辛い。でも今日は二限の



【現代大学生の受講態度とその関連要因の研究】  
1985年、武蔵大学社会学科

授業に出なければ！この講義は出欠を取るから……単位を落とすわけにはいかないんだ。教室に着いたらまだ眠れはいい。教室は温かいし、先生の声もまわりの喧騒も通奏低音として環境音楽れる」（後略）。

それを今の学生に見せ、その感想を聞くと、逆に今の学生の生活と心情が透けて見えてくる。

「すごくだらしない生活、全く自分の為にならない」「生活リズムが乱れている」「はたしてこんな生活していいのか」「大学に行っている意味がわからない」「両親に申し訳ない」「しつかりバイトしてお金を稼げ」

このように、遊んでばかりいて、授業にもろくすっぽ出ない（出ても寝ている）当時の学生の姿を見て、今の学生たちは、呆れている。自分たちの生活とは違うと言いつける。またアルバイトをしていないのを不思議に思う。それだけ、今の学生は、真面目であり、授業にきちんと出席して、将来の就職に備えている。またアルバイトも生活の一部になっている。

このイラストと文章には、当時の学生の素養が表れている。またユーモアのセンスにも溢れている。しかし、今の学生はそこに思ひは至らない。当時の学生

は、大学の授業には出なくても、これだけのものを書く素養を備えていた。それは、当時の大学生活から得ていたものであろう。

## 二 真面目化する大学生

最近の学生が、真面目化、大人に徒順化していることは、様々なデータに表れている。たとえば、全国大学生協の大学生調査のデータで、大学生の生活の重点の変化を見ると、一九八〇年以降、「豊かな人間関係」が減少して、「勉強第二」と答える学生が増加している（図2）。この傾向が特に顕著なのは、男子学生、三年生、私立大生である。

同じ調査のデータでみると、学生の授業への満足度は、年々高く

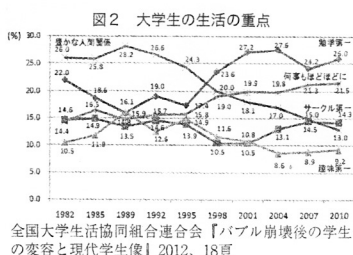
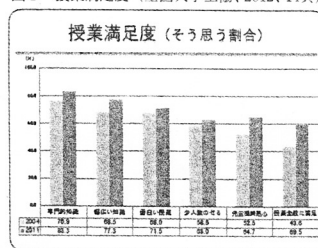


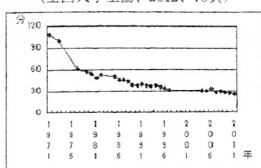
図2 大学生の生活の重点  
全国大学生協調査データ（『バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像』2012、18頁）

図3 授業満足度（全国大学生協、2012、14頁）



現代の学生たちが、大学の授業に熱心に出席し、授業や教員や大学に満足するようになっているわけでも、自主的な学習や読書の時間が増えているわけでもない。学生たちは、大学の教科書は購入しても、自主的な読書の為の、書籍費は年々減少している。大学生の一日当たりの平均読書時間は、一九七一年には一〇八分だったものが、年々激減して、二〇〇四年までには

図4 一日当たりの平均読書時間  
（全国大学生協、2012、70頁）



二九分と三〇分を切り、二〇一一年には二五分になっている（図4）。

かつての学生は、大学教師以外の、思想家（作家、詩人、評論家、芸術家）から多くを学んでいた。また、交友関係、サークル活動、遊び、テレビ、旅行、学生運動を通して、様々なことを学んでいた。一方、今の学生にとって、勉強＝大学の授業となり、勉強（学習）は、大学の教師から教えられるもののみになっている。経済的に苦しく、日常的にアルバイトをすることは必須になり、合宿や旅行も減っている。

現在の文部科学省のすすめる大学改革は、教育課程の体系化（シラバス等）、教育方法の改善（アクティブラーニング等）、学習支援環境の充実、教員の教育力の向上（FD等）など、入学してくる学生へ手厚い配慮、支援をするようになっている。

渡部真は、それを「伝統的大学」から「中学・高校」

なっている（図3）。それだけ、学生は教員に徒順に、また真面目になっている。

今の学生は授業だけでなく、教員、職員、そして大学全体への満足度も高くなっている。

## 三 学生の読書量の減少、自主性の減少

現代の学生たちが、大学の授業に熱心に出席し、授業や教員や大学に満足するようになっているわけでも、自主的な学習や読書の時間が増えているわけでもない。学生たちは、大学の教科書は購入しても、自主的な読書の為の、書籍費は年々減少している。大学生の一日当たりの平均読書時間は、一九七一年には一〇八分だったものが、年々激減して、二〇〇四年までには

へ移行する「学校化」として捉え、「自由な時間と空間」が少なくなり、「価値の多様化」「学生の自発性」「強いモラトリアム性」が失われつつあるとしている（武内清編『キャンパスライフと大学の教育力』二〇〇九年、科研報告書）。

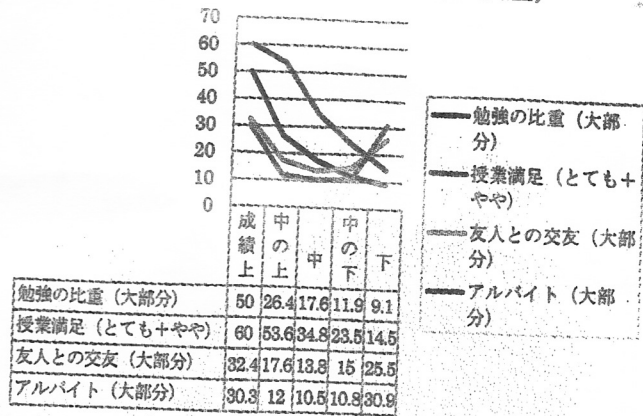
このように、現代の大学は、「学校化」しており、学生は「生徒化」し、「素直」な傾向があり、大学や教師の教育や指導次第で、どのようにも変わりうる可能性を有している。しかし、大学や教員の教育や指導のし過ぎは、大学生の自主性、主体性の形成を損なう面もある。

## 四 学生文化の大学差、個人差

現在（二〇一一年）全国で大学七八〇校・短大三七校、合わせて一六七校あり、そこに在籍する学生の特質、学生文化は様々である。

大学の伝統や入学偏差値に規定され、大学には大きく三つのタイプがあり、各大学の学生文化は違っていることを我々は調査から明らかにしてきた。つまり、学生が教養、モラトリアム志向の「伝統総合大学」、

図5 多様化する学生（成績差）



武内清他『敬愛大生の素顔』2013年

が存在する。図5は、地方都市にある小規模な私立大学でも、学生の特徴がいかに多様化しているかを示すデータである。友人関係やアルバイトの比重に大きな差がないものの、勉強に比重を置く学生もいれば、そうでない学生もいる。その差は大きい。

学生は、大学や教師の指導如何でいかようにも変容する。偏差値上位の大学に通っているには目立たなかった学生が、下位の大学ゆえに教師から目をかけられ、伸びる場合がある。

学生が就職・資格志向の「新興大学」、そしてその中間の「中堅大学」である（武内清編、前掲書）。学生たちは、入学したそれぞれの大学の学生文化の影響を受け、その大学の学生らしく社会化される。

しかし、一方で、同

じ大学にも多様な学生

## 五 大学生の生徒化の意味するもの

現在情報は溢れ、またどの分野でも科学、技術、学問の進歩は著しく、自己流で学べる時代ではない。大学において、その基礎の部分を教員から学ぶ必要性は高まっている。その意味で、今の学生の大学の授業への真面目な取り組みは必要であり、好ましいことであろう。

また経済不況の長期化の中で、実用性のある分野や資格取得の分野への人気が高まっている。実用性や実践性の習得の中から、多くの学びはある。しかし、同時に、目先の専門性や実用性を超える学びも、転換期には必要である。それは「いまとここの現実世界について懷疑し、自省し、現実世界を超越する理想主義につながるものである」（竹内洋『学問の下流化』二〇〇八年、中央公論新社）。

現実を超越する理想への憧憬を抱きつつ、自省し、普遍的な教養や学問を希求する態度の形成も、今の学生に求められている。それは、生徒化とは逆方向の、大学生らしい高度な遊びである。

## 1. 要約

現在大学進学率は半数を超え、大学全入時代に突入しているといっても過言ではない。そのような社会の中、大学生の生活及び価値観に変化は見られるのであろうか。著者の経験を基に大学生論を概観していく。

ほんの 30 年前までは大学はレジャーランドといわれ、学生は大学生という社会に出るまでのモラトリアム期間を交友活動に勤しむなどして満喫していた。この時期の大学生は、過酷な受験競争に対する反動でこのような行動に至ったと考えている。その暮らしぶりは「武蔵太郎君の一日」にも如実に、かつユーモラスに描かれている。しかしながら、現代の大学生はそのような独創性には気付くことなく、ただこの学生の不真面目さを糾弾するに留まっている。そこから著者は「大学生の真面目化」を指摘している。その指摘を著者は大学生の生活の重点アンケートを以て裏付けたが、著者はさらにこの考えを発展させ、生徒の真面目化に加え、大学の学校化・学生の生徒化を描き出した。また、大学が伝統総合大学・新興大学・中堅大学の三極化しているとも述べ、その大学の実情に合わせて学生文化も形成されていくと分析している。その中でもさらに学生は多様化を見せているわけであるが、そのような学生をどのように導いて行くかは大学教員の手腕にかかっている場合もある。

しかし、そのような中で本当に大学が、もとい学生に求められていることは何か。著者は現代の情報化社会・経済不況の現状を踏まえた上で、将来の就職に直結した実用性のある学問を効率よくこなしていく学び方にも一定の理解を示している。その一方で、武蔵太郎君のように幅広い教養・造詣を深めるためには実用性重視の学問だけではなく、普遍教育を探究していく「大学生らしい遊び」もこなしていくことが必要であると私たち学生に説いている。

## 2. コメント

私はバブルが崩壊した直後の「失われた 10 年」のまっただ中に生を受けたため、経済観念に関しては不景気の世相が学ばせてくれたと考えている。一方、両親はオリンピック景気等に見舞われ、高度経済成長期からバブルへと、青春時代を好景気の中で過ごしてきた所謂「バブル世代」である。幼少期こそ両親は私に確かな経済観念を身につけさせる為に金銭面では厳しくしてきたものの、最近では見る影もなく、浪費ぶりを私が咎めることも珍しくなくなった。時代がそうさせるのかと懐疑になる時もあるが、金銭感覚のズレは就職など、将来の展望にも如実に現れる。しばしば言われることであるが、友人を始めとして我々大学生がボランティア活動や課題にアルバイトと、何足の草鞋を履いているのかわからない様子を見ると、大人は大抵の場合「頑張るねー、私が君くらいの時はもっと遊んでたなあ」などと声を掛けてくるのだ。しかし、私たちのような不景気に加えて「ゆとり世代」という二重のハンデを背負う者たちにとっては日々がサバイバルレースであり、失敗は許されないという世界の中で生きているのである。従って、大学へ進学することさえも既に就職を見越して行わないと下手をすれば食いつぶれるというある種の強迫観念で進学している学生も少なからずいるのではないか。そういったことを鑑みると、武蔵太郎君の生活を描いた独創性・ユーモアセンスを含めた教養もロングスパンで考えると必要不可欠なことであると思うが、取りあえず手に(安定した)職をつけるためにできるだけ効率よく、失敗することなく学ぶことを望まれた現代の大学生の人生プラン設計に対する焦燥感や、ある種の強迫観念も私は首肯できる。だからといって著者の言う学問を希求する態度が必要ないとは思っていない。確かに学問に対する意欲的な姿勢も重要であるが、それにはまず就職予備校と化してしまった大学のあり方そのものの抜本的な見直し、それから「入るのは大変、卒業は簡単」と言われる大学入試制度を変えるなどして、学習者の学習に対する自発的な動機付けがなされるような工夫をこなしていくことも視野に入れていかなければ、学生の生徒化は加速していくのではないだろうかと思った。

## &lt;要約&gt;

現在、大学・短大の進学率が56.8%(2011年)で、同年代の6割近くが通うようになっている。現代の大学は昔の大学生と比較して変化しているのかどうなのか考えていく。大学生に対するデータや著者の体験から考えている。著者が教員になった1970年代の末頃は、学生達はあまり授業に出席することではなく、サークル活動やコンパ、交友、合コンに明け暮れていた。しかし、当時は大学・短大進学率は3割台(1980年37.4%)であり、大学に入学後は過酷な受験勉強の反動で、勉強ではなく遊びに明け暮れてしまっていたという背景があった。大学卒業後は猛烈サラリーマンとして働くことが宿命づけられていた彼(女)らは、受験と就職の谷間の4年間を、人生の中の唯一の休息(モラトリアム)の時期として楽しんでた節がある。モラトリアムとは、社会的義務の遂行を猶予される期間ないしはそうした猶予状態にとどまろうとする心理傾向のことである。この当時の学生生活をみた現代の学生は、「すごぐだらしない生活で自分のためにならない。」や「生活リズムが崩れている」などの意見がでた。これらの意見から現代の学生像が見受けられる。現代の学生は真面目あり、授業にしっかり出席して、将来の就職に備えている。またアルバイトも生活の一部になっているようである。真面目化、大人の従順化していることは様々なデータに表れている。「豊かな人間関係」が減少して、「勉強第一」と答える学生が増加している。学生の授業への満足度は年々高くなっている。それだけ、学生は教員従順に、またまじめになっている。今の大学全体への満足度も高くなっている。しかし、読書時間は減少し、自主性も減少している。渡部真は、「伝統的大学」から「中学・高校」へ移行する「学校化」として捉え、「自由な時間と時間」が少なくなり、「価値の多様化」、「学生の自発性」「強いモラトリアム性」が失われつつあるとしている。学生は、大学や教師の指導如何でいかようにも変容する。現実を超越する理想への情景を抱きつつ、自省し、普遍的な教養や学問を希求する態度の形成も、今の学生に求められている。それは、生徒化とは逆方向の、大学生らしい高度な遊びである。

## &lt;コメント&gt;

著者の教員になった当時の学生はあまり学校の授業に出席をしていなかったが、その空いた時間に他の趣味や遊びをすることによっていろいろな面白い能力を伸ばしていた。しかし、現代の学生は真面目になっているのだが、このような体験がないため学校で習ったことしか知らないという現状がある。それに加え、不経済によりアルバイトに精を出す学生が大半である。旅行など学校以外の場へいく機会も少ない。悟り世代と言われる例があるように、自分の将来のモデルや目標を達成することに必要最小限のこのみすれば良いと考え、それ以外をしなくても良いと考えているのかなと感じます。しかし、これらのような考え方や生活の変化は社会環境の変化なども理由だと考えるため、この考え方を変えようとしても無理なことであると考えます。真面目で学校の授業にはしっかり出席するので、この能力を生かしていくべきだと考えます。現代の学生必要になってくるのは自主性を伸ばすことにあると考えます。変動の激しい社会になってきている現在、自主性が重要であり、何事にもぶち当たり適応していく必要があると考えるからです。